

『虞美人草』の五重塔

Junko Higasa

『虞美人草』第五章を読み終わって疑問は解決したのに、再び私の袖を引っ張るフレーズがある。それは一次疑問を通過することによって生まれた新たな疑問で、腹の底から気泡のように浮かんでくる。「五重の塔...五重の塔...」詩的な藤尾が打ち捨てて家庭的な糸子が「面白いのよ」と言った五重の塔。「面白い？何が？」何故「美しい」でも「見事」でもなく「面白い」のか？「釘を一本も使っていない木造建築」という建築学的面白さであれば、この塔だけに限るまい。それならまだ別の意味があるはずだ。そこでまず「五重の塔」自体の意味を調べてみた。やはり建物にはそれなりの意味がある。五重の塔は仏教的な宇宙観を表現したもので、この世を形成する5つの基礎を意味する。この「宇宙」は、宗教観と相俟って、甲野さんが勉強する哲学の意識の焦点をも意味する。その塔の持つ意味を以下に、建築構造通りに列記する。

5. 空(宝珠) 去(未訪) 釈迦没後 2500年(1956) 仏法はすたれ、人が争う。
4. 風(請花) 伽(像法) 釈迦没後 2000年(1456) 教えが薄らぎ、寺・塔を建立。
3. 火(笠) 羅(像法) 釈迦没後 1500年(956) 修行より読経・説法が流行る。
2. 水(塔身) 婆(正法) 釈迦没後 1000年(AD456) 真面目な修行者がまだ残存する。
1. 地(基礎) 阿(正法) 釈迦没後 500年(BC44) 説法を聞いて悟りを開く。

釈迦生年は諸説あり確定的なことは言えないが、インドの2500年祭から逆算して入滅をBC544年とすると上記のようになる。紀元は西暦78年。ただしBC386年没説もあり、158年の開きがある。いずれにしても日露戦争や『虞美人草』執筆時代(1907年)には釈迦の教えは薄らいでいる。

こう見ると漱石が「糸子」に「五重の塔が面白い」と言わせたのは、藤尾と糸子の人間性を対比させるためだけではないような気がする。この場面は「夢窓国師や大燈国師が御堂を作った」という甲野さんと宗近君の会話を引き継いで、次に到来する仏法が廢れて人が争う時代を示唆しているようにも思える。「争う」とは日露戦争における異人種間の戦争ばかりではない。時勢は文明病にかかった同国民同士が我先にと争う時代である。その社会の中で人間の第一義である「真面目」を備えている糸子の塔は意識の中にはっきりと在る。それから離脱しようとしている藤尾の塔は霞む山の中に薄く見える。小野さんは塔に覚えがないと言い、自分の目指す地位のために役立たないそれを藤尾に追従して霞の中に安置しなければならない。「東山の五重の塔」という表現からすると、それはおそらく観光スポットとなった法観寺の八坂の塔だろう。現地人には何でもない景色であるが、スノップの自慢の種としては格好の材料である。

そして漱石は世間を評する。『刺身を眺めただけで台所へ下げる人もある。五重の塔をどうかしたがる連中は、刺身を食わなければ我慢の出来ぬように教育された実用主義の人間である』この実用主義人間とは、我先に新文明の利潤を手にする民である。真面目を旨とする国民は、国家繁栄のために個性の発展を奨励されながら、日常生活では決まった枠からはみ出すことを許されず、鉄道事業を発展させるために奨励された「観光」という名の非日常時間という特権を眺めて暮らすのである。『弱い者につらく当たる真理』が蔓延する世の中で『道義は弱い者の頭かしらに耀かず』心細い。(2013.7.5)